ラブライブ！サンシャイン!!×ヴァンガード～私たちが掴む可能性～

穂乃果ちゃん推し

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第２回ラブライブ！ヴァンガードカップで、強敵『Ａ―ＲＩＳＥ』を降して優勝を遂げたμ’ｓ。そしてその余波はアキバだけに留まらず、世界中へと広がって行った！

そして……簡素な田舎町に住むこの少女も、伝説の誕生を目の当たりにし、心に決めた……『私も、あの人たちみたいに輝きたい！』と！

今、未知なる輝きを求めて、ここに９人の少女たちが立ち上がる！今叫べ！スタンドアップ！ＴＨＥ　ヴァンガード！

目次

Ａｑｏｕｒｓ、始動！
第１話《始まりの風》――――１
第２話《獅子ＶＳ海賊姫》――９
第３話《転校生が来た！》――２０
第４話《聖なる白き剣士》――３５
第５話《赤髪の少女とほんわか少女》
５２
第６話《堕天使、降臨》――６３
第７話《梨子ＶＳ善子》――７２

Ａｑｏｕｒｓ、始動！
第１話《始まりの風》

【浦の星女学院：２―Ａ教室】
「ふああ～……」

　春の暖かい日差しが教室内に降り注ぐ、４月のこの頃……私、高海　千歌はウトウトとしていました。

「もう、食べられないよぉ……むにゃむにゃ」
「千歌ちゃ～ん、起きて～」
「……んぅ？よーちゃん？」

　眠りこけっていた私を起こしたのは、幼馴染の渡辺　曜ちゃん。アッシュグレーの髪をセミロングにしており、明るくて頼りになる女の子。……曜ちゃんの顔が渋っているのには、少し理由があって……。

「高海さん……高海さん！」
「うひゃあ！ど、どうしたんですか!?」
「『どうしたんですか』じゃありません！貴女、また居眠りしてましたね？」

いきなり大声で私を起こしたのは、担任教師の星川　輝子先生。青い髪をショートボブにしていて、ラフな格好に身を包んでいる数学の先生。怒ると怖い事で有名だけど、自他共に厳しい事でも有名な先生。……現に私は、今どっぷりと怒られていて……。

「高海さん、あ・れ・ほ・ど！授業中は寝ては行けないと言いましたよね？」
「は、はい……」
「罰則として《課題プリント２枚》を課します！明日の朝イチまでに提出する事！分かりましたか？」
「はい！すみません……」
「絶対やって来るように！……さて、続きましては」

私をドヤしつけた後、星川先生は授業へと戻って行きました。……そしてその日の放

課後。

「あーあー……何でこんなのあるんだろ」
「仕方ないよ、千歌ちゃん。誰だって寝てたら、それは怒られるよ」
「そうだけどさ～……あっ、曜ちゃん！久しぶりにヴァンガードしない？」
「あっ、いいね！やろうやろう！」

そう言って私と曜ちゃんは机をくっ付けて、ファイトできるような盤面を作りました！……絶対に負けないよ！

「始めるよ！千歌ちゃん」
「うん！よろしくね！」
「スタンドアップ！ヴァンガード！」

そう言って私と曜ちゃんは、場に伏せられていた1枚のカードを表に返しました！舞台は海賊船……不気味だけど、絶対に負けないよ！

「〈踊る海賊姫　アニエス〉!!!」
曜の手札５／ダメージ０
ーーーーー
踊る海賊姫　アニエス
クラン：グランブルー　アイコン：ブースト
グレード０／パワー６０００／シールド１００００／☆１
【自】ライドされた時１枚引く。
ーーーーー
「〈紅の小獅子　キルフ〉!!!」
千歌の手札５／ダメージ０
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
【職員室】〔一方、その頃……〕《輝子ｓｉｄｅ》
「はぁ……高海さんったら」
「お疲れだな、星川」
　そう言って私に声を掛けたのは、私の高校時代の恩師であり、今では頼れる上司である山田先生。私が頭を抱えているのを気づいたのか、手元にはコーヒーが入れられた

カップがありました。

「何かあったか？」

「聴いてくださいよ……実は」

しばらくの間、私は山田先生にココ最近あった事を話していました。……キチンとやってると良いけど……。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

【2―A教室】【TURN1】〔PL：曜〕

「私から行くよ！ドロー、ライド！〈微笑する海賊姫　ウルミナ〉！ソウルにある〈踊る海賊姫　アニエス〉の効果で1枚ドロー！」

曜の手札5↓6↓5↓6

ーーーーー

微笑する海賊姫　ウルミナ

クラン：グランブルー　アイコン：ブースト

グレード1／パワー8000／シールド10000／☆1

【自】このユニットが（V）か（R）に登場した時、あなたのデッキの上から2枚をドロッ

プに置く。

ーーーーーー

「さらに！ウルミナの効果で、山札の上から２枚を破棄！私はこれでターンエンド！」

曜の手札６／ダメージ０／ドロップ０→２

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

【ＴＵＲＮ２】〔ＰＬ：千歌〕

「私のターン！ドロー、ライド！〈美技の騎士　ガレス〉！ソウルにある〈紅の小獅子キルフ〉の効果で１枚ドロー！」

千歌の手札５→６→５→６

ーーーーーー

美技の騎士　ガレス

パワー８０００／シールド１００００／☆１

ーーーーーー

「行くよ！ガレスでヴァンガードに攻撃！」

「ノーガードで対処するよ！」

「ドライブトリガー確認！」

千歌の手札６→７

《ドライブチェック》
①〈灼熱の獅子　ブロンドエイゼル〉

「くっ！ダメージチェック！」
曜のダメージ０→１

《ダメージチェック》
①〈不死竜　スカルドラゴン〉

「これでターンエンド！」
千歌の手札７／ダメージ０

曜ちゃんには何時も負けてばかりだったから……今度は絶対に勝つ！

――――――――――――――――――――――――

【東京：福原高校　ヴァンガード部部室】
「んー……ちょっと物足りないね」

「そうですわね～もうちょっと、張合いのある相手が欲しいですわね」
「お前たち……目指す物は分かってるのか？」
「勿論ですよ、伊吹先生。僕たちが目指すのは、『全てのヴァンガードファイターの頂点』……ただ一つですから」

その頃、この部室の中では……２人の怪しい眼光が、まだ見ぬ先を見据えていたのだった。

第２話《獅子ＶＳ海賊姫》

【ＴＵＲＮ３】〔ＰＬ：曜〕
「私のターン！ドロー、ライド〈嘲笑する海賊姫　エニシア〉!!」
曜の手札６→７→６／ダメージ１／ドロップ２
ーーーーー
嘲笑する海賊姫　エニシア
種別：ノーマルユニット
クラン：グランブルー　アイコン：インターセプト
グレード２／パワー１００００／シールド５０００／☆１
【自】【（Ｖ）／（Ｒ）】：登場時、【コスト】［Ｃブラスト（１）する］ことで、あなたのデッキの上から３枚をドロップゾーンに置き、君のドロップゾーンから１枚までを（Ｒ）にコールする。
【自】ライドされた時、君のデッキの上から５枚をドロップゾーンに置く。
ーーーーー
「エニシアの効果！１枚をカウンターブラストして……デッキの上から３枚を破棄！そ

の中から〈剣豪の海賊姫　シェルミィ〉を左前にスペリオルコール！」
　曜のダメージ１→０／ＣＢ０→１／ドロップ２→５→４
「ドロップゾーンから、新しいユニットが出て来たぁ！」
「あっはは！これが私の戦略……《グランブルー》だよ！落ちし秘宝をその手に掴む、海賊団！」
ーーーーー
　剣豪の海賊姫　シェルミィ
　種別：ノーマルユニット
　クラン：グランブルー　アイコン：インターセプト
　グレード２／パワー９０００／シールド５０００／☆１
【起】【（Ｒ）】『ターン１回』他のユニットがコールされた時、【コスト】［Ｓブラスト（１）する］ことで、君のデッキの上から３枚をドロップゾーンに置き、このユニットのパワー＋５０００。
ーーーーー
「さらに……おいで！〈微笑する海賊姫　ウルミナ〉！この瞬間に〈剣豪の海賊姫　シェルミィ〉の効果発動！ヴァンガードのソウル１枚を取り除く事で、私のデッキの上から３枚を破棄して、シェルミィのパワー＋５０００！」

曜の手札６→５／ドロップ４→５→８
「いきなりパワー増加?……とんでもないよ、曜ちゃん!」

剣豪の海賊姫　シェルミィ
ＡＴＰ９０００→１４０００

「行くよ!エニシアでヴァンガードにアタック!」
「ノーガード!」
「ドライブトリガー確認、ヨーソロー!」
曜の手札５→６

《ドライブチェック》
①〈投擲の海賊姫　ドゥーチェ〉☆

「ゲット!クリティカルトリガー!パワーはシェルミィに、クリティカルはヴァンガードに!」

剣豪の海賊姫　シェルミィ
ＡＴＰ１４０００→２４０００
嘲笑する海賊姫　エニシア
☆１→２

「ううっ！ダメージチェック！」
千歌のダメージ０→２

《ダメージチェック》
①〈真実の聴き手　ディンドラン〉
②〈光輪の盾　マルク〉引

「ゲット！ドロートリガー！パワーはガレスに与えて、私はカードを１枚ドロー！……
やっと来たね」
千歌の手札７→８

美技の騎士　ガレス

ＤＦＰ８０００→１８０００

「シェルミィ！ウルミナの支援を受けて……ヴァンガードに攻撃！」

剣豪の海賊姫　シェルミィ

ＡＴＰ２４０００＋８０００→３２０００

「その攻撃は危ない……！私を護って！〈エリクサー・ソムリエ〉でガード！」

千歌の手札８→７

美技の騎士　ガレス

ＤＦＰ１８０００＋２００００→３８０００

「仕方ないか～…私はこれでターンエンド！」

曜の手札６／ダメージ０／ＣＢ１／ドロップ８

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

【ＴＵＲＮ４】〔ＰＬ：千歌〕

「私のターン！ドロー、ライド〈神技の騎士　ボーマン〉！効果で手札１枚を捨てる事で、中央後に〈美技の騎士　ガレス〉をスペリオルコール！」

千歌の手札７→８→７→６

ーーーーーー

神技の騎士　ボーマン

グレード２／パワー９０００／シールド５０００／☆１

ーーーーーー

「私の場にボーマンとガレスがあるので……手札にある〈灼熱の獅子　ブロンドエイゼル〉の効果を発動！」

「ええ!?」

「このユニットは、私の場に〈神技の騎士　ボーマン〉と〈美技の騎士　ガレス〉が存在するなら……ソウルの〈紅の小獅子　キルフ〉をドロップする事で、手札からスペリオルライドできる！〈灼熱の獅子　ブロンドエイゼル〉にスペリオルライド!!!」

千歌の手札６→５

ーーーーーー

灼熱の獅子　ブロンドエイゼル

種別：ノーマルユニット

クラン：ゴールドパラディン
アイコン：ツインドライブ!!　ギフト：アクセル
グレード３／パワー１２０００／シールド無し／☆１
【起】【手札】：あなたの、（Ｖ）か（Ｒ）に「神技の騎士　ボーマン」と「美技の騎士ガレス」がいるなら、【コスト】［「紅の小獅子　キルフ」を【ソウルブラスト】（１）］することで、このカードを【スタンド】でライドし、相手のヴァンガードがグレード２以下なら、そのターン中、このユニットのドライブ―１。
【自】【（Ｖ）】：アタックした時、あなたの手札を１枚（Ｒ）にコールしてよい。

――――――

「イマジナリーギフト獲得！『アクセル』発動！」
「（千歌ちゃんのデッキの真骨頂！絶対に止めてみせる！）」

コツコツコツコツコツコツコツコツ!!

「（や、ヤバい！）」
「（こ、ここで星川先生に来られると！）」

ガララッ！

「貴女たち！何をしているのですか！」
「ヒィ！す、すみません！……なんだ～ダイヤ生徒会長か～」
「どうしたんですの？そんなに慌てて」

千歌たちは目の前に立っている、黒髪のストレートヘアをしていて、口許に小さなホクロがある少女……黒澤　ダイヤ生徒会長に説明を始める。……そして、暫くした後。

「ぶっぶーーーーーーですわ！」
「ううっ……」キーーーーーーン!!!
「大方……星川先生に見つからない様に、隙を見てヴァンガードをしていたのですよね？」

ダイヤの言葉は的を得ており、的確に千歌たちの心を抉って行く。それと同時に項垂れてしまう千歌たち。一息ついた後、ダイヤはこう言う。

「『ヴァンガードをするな』とは言いませんが……やるべき事を、キチンと終わらせてからするのですよ？分かりましたわね？」
『は、はい……』
「失礼致しましたわ」

そう言って千歌たちの元から去って行くダイヤ。……そしてその後の教室内では。

「ファイト……続けられそう？」
「わ、私……無理かも」

『無理かも』と発言した千歌の言葉を受け、千歌たちは広がっていたファイトスペースを片付けて、課題プリントへと向かった。……そしてそんな2人を見守る様に、太陽がこれでもかと照り付けていた……。

――――――――――――――――――――

【一方、その頃……】
「ここが内浦……私、上手くやって行けるかな……？」

その言葉を呟きながら、ワインレッドの髪をストレートヘアでバレッタで止めた少女は家へと入って行った。……そして腰に提げられたデッキケースには《ロイヤルパラディン》のクランマークが刻まれていた。

――――――――――――――――――――――――

【東京：とあるカードショップ】〔同時刻〕

「ファイナルターン！黙示録の業火に灼かれ……そして消え失せろ！エターナル・フレイム！」

「うわあああああああ！」

その頃……とあるカードショップでは、１人の少年が１人のファイターを完膚なきまでに叩きのめしていた。

「何もんだよアイツ……」

「おい、アイツら……福原じゃねぇか！」

「マジかよ！俺勝てる訳ねぇぞ！」

その少年と付いていた少女の制服を見た途端、周りがザワメキだした！……中には熱

狂的なファンも居たが。

「素晴らしいですわ……ねぇ、颯樹くん？」

「今のままじゃ、足りない！確実に強くなるまで、特訓だ！碧月ちゃん……覚悟は出来てる？」

「はい！もちろんですわ！」

そう言って２人は特訓を始めた。……この２人を止める事のできる相手が現れるのは、今からそう遠くない先の話である。

第３話《転校生が来た！》

【通学途中のバス内】〔翌日〕

私と千歌ちゃんは何時もの様に、学校へと向かうバスへと乗っていました。そして、千歌ちゃんが話し始めました。

「ねぇ、曜ちゃん」

「何？千歌ちゃん」

「私ね、昨日家に帰って考えたんだ」

「考えたって……何を？」

私は千歌ちゃんの言った言葉が気になり、千歌ちゃんが続ける言葉を待ちました。

……そして千歌ちゃんはこう言いました。

「私、ヴァンガード部を作る！」

「ヴァンガード部？」

「うん！」
「いいねいいね！私もやるよ！」
「ありがとう、曜ちゃ～ん！」

そう言って千歌ちゃんは、勢い良く私に飛び付いて来ました！……もう、相変わらず千歌ちゃんは可愛いなぁ！

――――――――――――――――――――――――

【浦の星女学院…2―A教室内】

私たちが学校に着いて教室に入ると、クラスが少しだけ騒がしい状態でした！

「何だろう？」
「ねえ、これって……何なの？」

そう思った千歌ちゃんは、クラスメイトにこの状況を聞きました。そして驚くべき言葉を聞きました！

「あ！千歌ちゃん、曜ちゃん、聞いて！このクラスに……転校生が来るんだよ！」

「へ？」
「えええええええ!?」

私と千歌ちゃんは素っ頓狂な声を上げた後、二人揃って叫んでしまいました。……そうしたせいで、星川先生にはキツーーく叱られてしまいました。

「皆さん、おはようございます」
『おはようございます!』
「今日は、皆さんも知っての通り……このクラスに新しい仲間が加わる事になりました。入って来てもらいましょうか……どうぞ!」

星川先生が外にいる生徒に声を掛けました!その娘は、ワインレッドの髪をストレートヘアにしていて、髪をバレッタで留めた女の子でした!その女の子は、私たちの方を向くと、自己紹介を始めました。

「えっと……東京の音ノ木坂から来ました《桜内　梨子》です。よろしくお願いします」
『よろしくお願いしま～す!』

「では……桜内さんは高海さんの前の席です」

そう言われて桜内さんは、千歌ちゃんの前の席へと着きました。そして、千歌ちゃんは桜内さんに自己紹介を始めました。

「私の前だね！私、高海千歌！これからよろしくね、桜内さん！」
「私は渡辺曜だよ！ヨーソロー！」
「よ、よろしく……」
「あっ、桜内さんって……ヴァンガード、やってる？」

千歌ちゃんがそう聞くと、桜内さんは少しだけ考える素振りを見せましたが、千歌ちゃんの方を向き直してこう言いました。

「まあ、楽しむ程度には……」
「じゃあさ、梨子ちゃん！私とファイトしよ！」
「わ、私と……？」
「ねっ、良いでしょ～？」

千歌ちゃんのこの声に落ちたのか、桜内さんは千歌ちゃんのファイトを承諾しました。やった!３人目獲得だね!

―――――――――――――――――――――

【浦の星女学院：屋上】〔昼休み〕

「よろしくね、梨子ちゃん!」

「分かりました」

「スタンドアップ!（ＴＨＥ）ヴァンガード!」

千歌ちゃんと梨子ちゃんは、伏せられていたファーストヴァンガードを表にしました!それにしても『ＴＨＥ』の掛け声に《ロイヤルパラディン》か……最近流行ってるのかな?

「〈紅の小獅子　キルフ〉!!!」

千歌の手札５／ダメージ０

「〈ぐらいむ〉にライドします」

梨子の手札５／ダメージ０

――――――――――――――――――――――――――――――――――

【ＴＵＲＮ１】〔ＰＬ：千歌〕

「私のターン！ドロー、ライド〈美技の騎士　ガレス〉！キルフの効果で１枚ドロー！ターンエンド」

千歌の手札５↓６↓５↓６／ダメージ０

――――――――――――――――――――――――――――

【ＴＵＲＮ２】〔ＰＬ：梨子〕

「私のターンですね。ドローして〈ナイトスクワイヤ　アレン〉にライドします」

梨子の手札５↓６↓５

――――――――

ナイトスクワイヤ　アレン

グレード１／パワー８０００／シールド１００００／☆１

アイコン：ブースト

――――――――

「〈ぐらいむ〉の効果で１枚引きます。そのままヴァンガードを攻撃します」

梨子の手札５↓６

「ノーガード！」

「行きます。チェック・ＴＨＥ・ドライブトリガー」
　梨子の手札６↓７
《ドライブトリガー》
　①〈アルフレッド・アーリー〉
「うっ！ダメージチェック」
　千歌のダメージ０↓１
《ダメージチェック》
【１点目】〈聖弓の奏者　ヴィヴィアン〉
「私はこれでターンエンド」
　梨子の手札７／ダメージ０
　ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
【ＴＵＲＮ３】〔ＰＬ：千歌〕
「私のターン！ドロー、ライド〈神技の騎士　ボーマン〉！効果で手札１枚をドロップす

る事で〈美技の騎士　ガレス〉を左後列にコール！」
　千歌の手札６→７→６→５
「……あれ？見当たらない」

　ガレスをコールして少しした後、千歌ちゃんの動きが止まってしまいました！……あちゃー、固まっちゃったか～。

「……仕方ない！ボーマンでヴァンガードにアタック！」
「ノーガード」
「ドライブチェック！」
　千歌の手札５→６

《ドライブトリガー》
　①〈フレイム・オブ・ビクトリー〉☆

「ゲット！クリティカルトリガー！効果は全て〈神技の騎士　ボーマン〉に与えるよ！」

神技の騎士　ボーマン
パワー９０００＋１０００００↓１９０００
☆１↓２

「ああっ……ダメージチェック」
梨子のダメージ０↓２

《ダメージチェック》
【１点目】〈まあるがる〉引
【２点目】〈小さな賢者　マロン〉

「ゲット、ドロートリガー。パワーはアレンに与えて、私はカードを１枚引きます」
梨子の手札７↓８

「ターンエンド！」
千歌の手札６／ダメージ１

――――――――――――――――――――――――――――

【ＴＵＲＮ４】〔ＰＬ：梨子〕

「私のターンですね。ドローして……行きますよ、高海さん」
梨子の手札８→９
「ううっ」
「先程の間は何か知りませんけど、私は容赦はしませんよ。……颯樹くんからの教えだしね」
「？……梨子ちゃん？」

先程、梨子ちゃんがボソッと喋った事を聞こうとした時、梨子ちゃんが行動を起こしました！

「聖なる剣の名の元に、敵を砕くは白き騎士！立ち上がれ……私の分身！ライド〈ブラスター・ブレード〉!!!」
梨子の手札９→８
ーーーーー
ブラスター・ブレード
グレード２／パワー１００００／シールド５０００／☆１
アイコン：インターセプト

ーーーーーー
「こ、これが……〈ブラスター・ブレード〉……」
「き、綺麗……」
「左後列にコール〈ナイトスクワイヤ　アレン〉！効果で【カウンターブラスト】する事で、手札から〈ういんがる〉を中央後列にスペリオルコール！そうしたら、１枚ドローして……アレンのパワー＋３０００！」
梨子の手札８→７→６→７／ダメージ２→１／ＣＢ０→１
ーーーーーー
ういんがる
グレード１／パワー８０００／シールド１００００／☆１
アイコン：ブースト
ーーーーーー
ナイトスクワイヤ　アレン
パワー８０００＋３０００→１１０００
「右前列にコール〈文武の賢者　ジャーロン〉……左前列にコール〈沈黙の騎士　ギャラティン〉」

梨子の手札７→６→５

ーーーーー

沈黙の騎士　ギャラティン

グレード２／パワー１００００／シールド１００００／☆１

アイコン：インターセプト

ーーーーー

文武の賢者　ジャーロン

グレード２／パワー１００００／シールド５０００／☆１

アイコン：インターセプト

ーーーーー

「行きます……ジャーロンでヴァンガードに攻撃します。スキル発動。私のリアガードが３体以上居るので、パワー＋５０００」

文武の賢者　ジャーロン

パワー１００００＋５０００→１５０００

「〈真実の聞き手　ディンドラン〉でガード！」

千歌の手札６→５

神技の騎士　ボーマン

ＤＦＰ９０００＋１００００→１９０００

「行きます……ういんがるの支援を受けて、ブラスター・ブレードでヴァンガードに攻撃！スキル発動！ブラスター・ブレードのパワー＋５０００！さらに自身の効果で、私のリアガードが４体以上なので、クリティカル＋１！」

ブラスター・ブレード

パワー１００００＋８０００＋５０００→２３０００

☆１→２

「その攻撃を受けたら…危ない！〈光輪の盾　マルク〉で完全ガード！」

千歌の手札５→４→３

【完全ガードコスト】〈ウェイビング・オウル〉

「チェック・ＴＨＥ・ドライブトリガー！」
梨子の手札５→６
《ドライブトリガー》
①〈幸運の運び手　エポナ〉☆
「ゲット！クリティカルトリガー！効果は全て〈沈黙の騎士　ギャラティン〉に！」
沈黙の騎士　ギャラティン
パワー１００００＋１００００→２００００
☆１→２
「う、嘘!?」
「アレンの支援を受けて……ギャラティンでヴァンガードに攻撃！」
「……ノーガード、ダメージチェック」
千歌のダメージ１→３

《ダメージチェック》
【２点目】〈月影の白兎　ペリノア〉
【３点目】〈光輪の盾　マルク〉引

「ゲット!ドロートリガー!パワーはボーマンに、私はカードを１枚ドロー!」
千歌の手札３→４
「ターンエンドです」
梨子の手札６／ダメージ１／ＣＢ１

第４話《聖なる白き剣士》

《途中経過》【ＴＵＲＮ４まで】
千歌の手札４／ダメージ３／ＣＢ０
［Ｖ］〈神技の騎士　ボーマン〉：ソウル２
［中央後列］：無し
［右前列］／［右後列］：無し
［左前列］：無し
［左後列］〈美技の騎士　ガレス〉
ーーーーー
梨子の手札６／ダメージ１／ＣＢ１
［Ｖ］〈ブラスター・ブレード〉：ソウル２
［中央後列］〈ういんがる〉
［左前列］〈沈黙の騎士　ギャラティン〉
［左後列］〈ナイトスクワイヤ　アレン〉
［右前列］〈文武の賢者　ジャーロン〉

[右後列]：無し

――――――――――――――――――――

【ＴＵＲＮ５】〔ＰＬ：千歌〕

「私のターン！……ドロー！」

千歌の手札４↓５

千歌の引いたカードが虚空を切る……すると、そのカードは千歌の想いに応えるかのように、千歌の手札に加わった！

「行くよ……梨子ちゃん！」

「……！」

「荒ぶる獅子よ！己の願いを込めて、私と共に立ち上がれ！ライド〈灼熱の獅子　ブロンドエイゼル〉!!!」

千歌の手札５↓４

―――――

灼熱の獅子　ブロンドエイゼル

グレード３／パワー１２０００／シールド無し／☆１

アイコン：ツインドライブ!!　ギフト：アクセル

ーーーーー

「これが……高海さんのエースユニット！」

「やったね、千歌ちゃん！」

「イマジナリーギフト『アクセル』発動！」

千歌がそう宣言した瞬間、ギフトマークがブロンドエイゼルに吸い込まれるかのように、新しい力を与えた！それを確信した瞬間、千歌の瞳が輝き出した！

「〈聖弓の奏者　ヴィヴィアン〉をアクセルサークルにコール！スキル発動！【カウンターブラスト】（1）、【ソウルブラスト】（1）する事で……デッキの上から3枚を確認するよ！」

千歌の手札4→3／ダメージ3→2／CB0→1

ーーーーー

聖弓の奏者　ヴィヴィアン

グレード2／パワー9000／シールド5000／☆1

アイコン：インターセプト

ーーーーーー
聖弓の奏者　ヴィヴィアン
パワー９０００＋１００００→１９０００

《デッキの上３枚のカード》
①〈戦場の嵐　サグラモール〉
②〈だんてがる〉前
③〈神技の騎士　ボーマン〉

「私はその中から……〈戦場の嵐　サグラモール〉を左前列にコール！その後、残りをデッキボトムに置いて、ヴィヴィアンのパワー＋３０００！」

ーーーーーー
戦場の嵐　サグラモール
グレード３／パワー１２０００／シールド無し／☆１
アイコン：ツインドライブ!!　ギフト：アクセル
ーーーーーー
聖弓の奏者　ヴィヴィアン

パワー１９０００＋３０００↓２２０００

「さらに〈降魔剣士　ハウガン〉を中央後列にコール！……行くよ、梨子ちゃん！」

千歌の手札３↓２

「（……！な、何？高海さんから放たれる、この強烈なイメージは！）」

「ハウガンの支援を受けて……ブロンドエイゼルでヴァンガードに攻撃！ブロンドエイゼルの効果で、手札から〈聖弓の奏者　ヴィヴィアン〉を右前列にコール！」

千歌の手札２↓１

「（と言う事は……また、あの効果がくる！）」

「ヴィヴィアンの効果で、【カウンターブラスト】（１）、【ソウルブラスト】（１）する事で……デッキの上から３枚を確認するよ！」

千歌のダメージ２↓１／ＣＢ１↓２

《デッキの上３枚のカード》

①〈真実の聞き手　ディンドラン〉

②〈月影の白兎　ペリノア〉

③〈エリクサー・ソムリエ〉治

「その中から〈真実の聞き手　ディンドラン〉を右後列にコール！その後、残りをデッキボトムに置いて、ヴィヴィアンのパワー＋３０００！」

ーーーーー

真実の聞き手　ディンドラン

グレード１／パワー７０００／シールド１００００／☆１

アイコン：ブースト

ーーーーー

「これが最後のソウル！ディンドランの効果、発動！【ソウルブラスト】（１）する事で……１枚を【カウンターチャージ】して、ディンドランのパワー＋３０００！」

千歌のダメージ１↓２／ＣＢ２↓１

真実の聞き手　ディンドラン

パワー７０００＋３０００↓１００００

「（一瞬でこんなに展開……だけど、それは私だって同じ！ここで負けられない！）〈閃光の盾　イゾルデ〉で完全ガード！」

梨子の手札６→５→４

【完全ガードコスト】〈まぁるがる〉引

「ツインドライブ！」

千歌の手札２→４

《ドライブトリガー》

①〈だんてがる〉前

②〈フレイム・オブ・ビクトリー〉☆

「ゲット！フロントトリガー！前列全てのユニットのパワー＋１００００！続けて……ゲット！クリティカルトリガー！効果は全てアクセルサークルのヴィヴィアンに！」

聖弓の奏者　ヴィヴィアン（右前列）

パワー９０００＋１００００→１９０００

灼熱の獅子　ブロンドエイゼル

パワー１２０００＋８０００＋１００００→３００００
戦場の嵐　サグラモール
パワー１２０００＋１００００→２２０００
聖弓の奏者　ヴィヴィアン（アクセルサークル）
パワー２２０００＋１００００＋１００００→４２０００
☆１→２

「ちょ……う、嘘……」
「ディンドランの支援を受けて……ヴィヴィアンでヴァンガードにアタック！」

聖弓の奏者　ヴィヴィアン（右前列）
パワー１９０００＋１００００→２９０００

「ああ……ダメージチェック！」
梨子のダメージ１→２／ＣＢ１

《ダメージチェック》

【３点目】〈小さな賢者　マロン〉

「ガレスの支援を受けて……サグラモールでヴァンガードにアタック！」

戦場の嵐　サグラモール

パワー２２０００＋８０００→３００００

「ノーガード！ダメージチェック」

梨子のダメージ２→３／ＣＢ１

《ダメージチェック》

【４点目】〈世界樹の巫女　エレイン〉治

「ゲット！ヒールトリガー！パワーはブラスター・ブレードに与えて、ダメージを１枚回復します！」

梨子のダメージ３／ＣＢ１→０

ブラスター・ブレード

パワー１０００＋１００００↓２００００

「アクセルサークルのヴィヴィアンで、ブラスター・ブレードをアタック！」

「〈閃光の盾　イゾルデ〉で【完全ガード】!!!」

梨子の手札４↓３↓２

「も、もう１枚あったの!?」

「貴女が粘るなら……私だって！」

【完全ガードコスト】〈騎士王　アルフレッド〉

「……タ、ターンエンド」

千歌の手札４／ダメージ２／ＣＢ１

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

【ＴＵＲＮ６】〔ＰＬ：梨子〕

「……行きますよ、ファイナルターン！」

『ファ、ファイナルターン!?』

「（ま、不味い……！梨子ちゃんは、このターンで全て終わらせるつもりだ！何か策はあるの、千歌ちゃん！）」

「私のターン！ドロー、ライド……騎士たちを束ねし、聖なる剣！その力は正しく《騎士たちの主》！プリンス・オブ・ロイヤルパラディン！〈アルフレッド・アーリー〉!!!」

梨子の手札２→３→２

ーーーーー

アルフレッド・アーリー

グレード３／パワー１３０００／シールド無し／☆１

アイコン：ツインドライブ!!　ギフト：フォース

ーーーーー

「イマジナリーギフト『フォース』！効果は左前列のリアガードサークルに！」

沈黙の騎士　ギャラティン

パワー１００００＋１００００→２００００

「さらに〈アルフレッド・アーリー〉の登場時効果！【カウンターブラスト】（１）する事で……ソウルから左前列に現れて！私の分身！〈ブラスター・ブレード〉！その後、そ

のユニットのパワーを＋１００００して、１枚ドローします！」
梨子の手札２→３／ダメージ３→２／ＣＢ０→１
〈沈黙の騎士　ギャラティン〉【退却】!!!
ブラスター・ブレード
パワー１００００＋１００００＋１００００→３００００
「ソウルから現れた!?」
「ブラスター・ブレードのスキル発動！【カウンターブラスト】（１）、【ソウルブラスト】（１）する事で……アクセルサークルのヴィヴィアンを退却！」
梨子のダメージ２→１／ＣＢ１→２
〈聖弓の奏者　ヴィヴィアン〉【退却】!!!
「そ、そんな！」
「行きます……ジャーロンでヴァンガードに攻撃！スキル発動！私のリアガードが３体以上居るので、パワー＋５０００！」

文武の賢者　ジャーロン
パワー１００００＋５０００→１５０００

「もう1枚のヴィヴィアンでガード！」

灼熱の獅子　ブロンドエイゼル
パワー１２０００＋５０００→１７０００

「行きますよ……ういんがるの支援を受けて、アルフレッド・アーリーでヴァンガードに攻撃！」

アルフレッド・アーリー
パワー１３０００＋８０００→２１０００

「〈エリクサー・セレクター〉に〈フレイム・オブ・ビクトリー〉でガード！」

千歌の手札４→２

灼熱の獅子　ブロンドエイゼル
パワー１２０００＋２００００＋１５０００→４７０００

「チェック・ＴＨＥ・ドライブトリガー！」
梨子の手札２→４

《ドライブトリガー》
①〈幸運の運び手　エポナ〉☆
②〈ふろうがる〉☆

「えええええ!?」
「だ、ダブルクリティカルトリガー!?」
「効果は全てブラスター・ブレードに！」

ブラスター・ブレード
パワー３００００＋１００００＋１００００→５００００

☆1→2→3

「アレンの支援を受けて……ブラスター・ブレードでヴァンガードに攻撃します！」

ブラスター・ブレード
パワー50000＋8000→58000

「……ノ、ノーガード……ダメージチェック」
千歌のダメージ2→5／CB1

《ダメージチェック》
【4点目】〈降魔剣士　ハウガン〉
【5点目】〈だんてがる〉前
【6点目】〈灼熱の獅子　ブロンドエイゼル〉

WINNER：桜内　梨子！

――――――――――――――――――――――――

「かはぁ～！負けたぁ～！」
「……ふふっ」

梨子は少しの微笑を浮かべると、倒れている千歌の下へと歩いて行く。そして、手を差し伸べてこう言う。

「大丈夫？千歌ちゃん」
「あ、ありがとう、梨子ちゃん」
「よい……しょっ！」

床に倒れている千歌を、梨子は渾身の力で引き上げる。そして千歌の目を見てこう言う。

「私に何か手伝える事があれば……協力するわよ？ファイトも楽しかったし。」
「じゃあさ……」
『ヴァンガード部のメンバーに、加わってくれませんか!?』
「……分かりました、こんな私で宜しければ」

これで梨子を含めて3人となった。……だが、ここはまだまだスタートラインにしか過ぎなかった。それを知るのは、意外と直ぐに訪れるのであった。

第５話《赤髪の少女とほんわか少女》

東京から転校して来た……ワインレッドの髪をした少女、梨子に善戦の末、手痛い敗北をした千歌だったが、梨子を仲間に加える事に成功！その後３人は……。

【翌日】

「正式に、ヴァンガード部設立を認めてもらおう！」

「方法はあるの？千歌ちゃん」

「……梨子ちゃん、それに関しては問題無しだよ。曜ちゃん、例の物を！」

千歌に促された曜は、カバンの中から１枚のチラシを取り出した！そこには、千歌と曜に梨子のデフォルメされたイラストが、可愛く描かれていた！

「『ヴァンガード部、部員を求む！』……これで如何でしょうか！」

「良いよ良いよ～！掲示しに行こっ！」

「確かここは……『生徒個人での掲示を行なう場合は、生徒会長の承認を得る事』ってなってるわね」

すらすらと規則を諳んじた梨子に従い、千歌たちは生徒会長室を訪れた。

「すみません！2年A組の高海　千歌です！生徒会長に用があって来ました！」

『分かりました、お入り下さい』

中から声が聞こえた為、3人はそれに従って中へと入る。するとそこには黒澤　ダイヤ生徒会長が机に向かって座っていた。

「生徒会長、お願いがあって参りました」

「何ですの？」

「部活勧誘のチラシを掲示したいんです！良いですか？」

「……」

千歌がダイヤに要件を伝える。すると、ダイヤは考える素振りを一瞬だけ見せる。そして千歌たちに向き直って、こう告げる。

「構いませんわ。良いでしょう」
「ありがとうございます！失礼しました！」
「……最後に１つ、宜しいですか？」
「何ですか？」

千歌たちは生徒会長室を後にしようとする。そこをダイヤは制止する。止めたのは、聞きたい事があったからだ。

「この提案を……最初に提案した人は、何方ですの？」
「私です！」
「……悪い事は言いませんわ。諦めて下さい」
「……ど、どうして!?」
「何れ解りますわ。気を付けて下さいね」

その言葉を受けた後に設立書を受取って、千歌たちは生徒会長室を退室した。そして掲示したは良いものの、ココロのどこかで引っ掛かりがある3人だった。

――――――――――――――

【千歌たちが去った後の生徒会長室】
「……なかなか、面白いわね～」
「居たんですの？」
「ダイヤは相変わらずね～…この胸と同じように～♪」

突然にゅっと現れた1人の少女は、ダイヤの胸を摩りながら、そんな事を言ってのける。それに気づいたダイヤは顔を紅くしながら……。

「や、喧しいですわ！／／／」
「いやぁーん♪ダイヤったら、辛辣ゥ～♪」
「何時戻ってたんですの？……何の連絡や相談も無しに」
「今は言えないわ……あの娘たちにも、知る時が来るわ。その時までは言えないわ」
「……私、貴女の考える事が、極々偶に解らなくなりますわ」

そのような会話が生徒会長室で起こっていたのは、千歌たちは知る由もないのであった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

【廊下】

あの後に掲示されたチラシは、受け取る人は居るものの……入部してくれる人は皆無に等しかった。……そんな中。

「……あっ」
「ルビィ～ちゃん」
「ピギィっ。……は、花丸ちゃん？」
「どうしたんずら？何か見てたずらね」
「うゆ……」

先程までルビィが見ていたのは、千歌たちが掲示したチラシである。その手にはチラシが握られている。

「入りたいずら？」
「う、うん……でも、ルビィ……よ、弱いから……」
「安心するずら、マルも一緒に入部するずら」
「い、良いの……？」

「友達……ずらよ。マルたちは、友達ずら」

花丸の何気ない一言に勇気を貰ったルビィは、入部希望を伝える為……その場を動き始めた。

――――――――――――――――――――――――――――――

【中庭】

「これで大丈夫だよね！」

「第1段階成功！」

「ふふっ、そうね。……ところで、何処に行けばいいの？」

『ふぇ？』

梨子から発せられた素朴な疑問に、素っ頓狂な声を上げる千歌と曜。具体的な説明を梨子が行う。

「分からない？入部するにしても、それを聞くために何処に行けば良いのか、分からなかったら意味無いわよ」

『あっ』

「わ、忘れてたぁ～～～～～～～～～～！」

そう言って曜が叫ぶ。逆に千歌は首を傾げていたのを見て、梨子は溜め息を吐いていた。

ーーーーー

『わ、忘れてたぁ～～～～～～～～～～！』

「もしかして…あの人たちずら？」

「行ってみよう！」

そう言ってルビィと花丸は、千歌たち３人の下へと歩いて行く。そして３人の方を向いてこう言う。

「あ、あの！」

「なぁに？どうかした？」

「マルたち……ヴァンガード部に入りたいです」

「そ、それって……入部希望!?」

「は、はい！く、黒澤　ルビィです！よ、よろしくお願いします！」

「マルは……国木田　花丸ずら。……じゃなかった、です。よろしくお願いします」

ルビィと花丸が千歌たちに向かって自己紹介をする。花丸の自己紹介を聞いた、３人は少し笑いながらもこう答える。

「花丸ちゃん……だっけ？」
「は、はい」
「無理に変えなくても良いよ？自分の個性は消さない方がイイよ！」
「わ、分かりましたずら！これからよろしくお願いしますずら！」

そう言ってルビィと花丸は設立書に署名をし、放課後に生徒会長室へ立ち寄る事に決めた。

――――――――――――――――――――――――

【生徒会長室】
「生徒会長、部活の設立書です！」
「分かりましたわ。……ん？」
「どうかしたんですか？」

「私の目が悪いのでしょうか……ここに《黒澤　ルビィ》と書かれてあるのは、もしや？」

ダイヤが目を向けると、驚いたかの様にルビィが肩を震わせる。それを見たダイヤは続ける。

「やはり貴女でしたのね？ルビィ」

「お、お姉ちゃん……ル、ルビィね？」

「分かりましたわ。妹のやる事に口を挟む事は出来ません……頑張りなさい」

「ありがとう、お姉ちゃん！」

ダイヤは部活設立書に目を通す。そして承認の印鑑を押し、千歌たちに告げる。

「これでめでたく承認されましたわ。……部室へとご案内します」

「やった！」

そう言って、ダイヤは５人を部室へと案内する。その時生徒会長室には、爽やかな風が吹き抜けていた……。

――――――――――――――――――――

【東京：福原高校　ヴァンガード部部室】

「何時も何時もありがとね、優花ちゃん」

「はい！私、颯樹先輩のお役に立てて、とても光栄です！」

　この場では生徒会業務を、颯樹ともう一人の少女……赤髪をポニーテールに纏めたスレンダーな体型をした女の子である、絢辻　優花が進めている。

「それにしても……珍しいですね」

「ん？どういう意味？」

「何だか、颯樹先輩……顔が嬉しそう♪」

「……」

　表情の変化を見破られ、黙り込んでしまう颯樹。それを見て優花はしてやったりの顔をしている。その後に颯樹は続ける。

「……昔の事を思い出してただけさ」

「そうですか。……特訓の相手をお願いします！」
「ＯＫ！」
ここにも己の力を高める為に、日々奮闘している者たちがいた……。

第6話《堕天使、降臨》

『うわぁ～…』

あの後、ダイヤに連れられて部室へと訪れた5人。その中の状況は惨憺たるモノだった。一瞬目を閉じて、ダイヤは千歌たちに告げる。

「ここが、ヴァンガード部の部室となりますわ。散らかってる所がありますので、片付けてから使って下さいね」

『は、はい……』

そう告げてダイヤは、生徒会長室へと戻って行く。……その一方で、取り残された5人はと言うと。

「……片付けよっか」

「そ、そうだね」

「マルは積み重なっている本を持っていくずら」
「ル、ルビィは…物の整理をします！」

そう言ってルビィと花丸は動き出す。それを見た３人は箒と雑巾を持って、部室内の清掃を始めた。
【数十分後】
「何とか片付いたね～…」
「これなら活動できるわね」
「じゃあ、これを部室前に飾って……と」

千歌はそう言って『ヴァンガード部』と書かれたネームプレートを部室前に掛ける。
……今ここに、ヴァンガード部の活動がスタートしたのだった！

「……ところで、気になってたんですけど…この部って主に何をするずらか？」
「それはヴァンガード部と言う位だし……ヴァンガードの各種大会に出て、良好な成績を収めることだね」
「あっ！ルビィに…考えがあるんですけど、良いですか？」

「ん？」
　そう言って千歌たち３人は首を傾げる。ルビィの言っている事に納得する事になるのは、次の日になってからであった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
【浦の星女学院：通学路】〔翌日〕
　次の日、ルビィと花丸は共に通学路を歩いていた。その前方には、黒い髪を頭の上でお団子にしている女の子が歩いて居た。花丸はそれを見るなり、声を掛けた。
「よーしこちゃん」
「善子言うな！ヨハネよ！…何だ、ずら丸ね？」
「やっぱり、善子ちゃんだったずらね。学校に来る気になったずら？」
「え、えっと……？」
　善子と呼ばれた少女と花丸の話している事に、若干付いて行けない雰囲気のルビィが２人に問掛ける。それを見た花丸はルビィに善子の事を紹介する。

「この娘は《津島　善子》ちゃんずら。マルとは幼稚園の頃から一緒の幼馴染みずら」
「まっ、そういう事よ。序に、私の事は《堕天使　ヨハネ》と呼びなさい」
「堕天使……ヨハネ？」

言われている事の意味が分からず、首を傾げるルビィ。それを見た善子は花丸に涙ながらに訴える。

「見事にスベってしまったじゃない！どうしてくれるのよ、また学校行けなくなるわよ！」
「大丈夫ずらよ。マルも居るし、今度は先輩たちも善子ちゃんの味方ずらよ」
「ずら丸……ありがと！」

ほんわかムードを二人の間で保っていると、２人の背後からトンデモナイ凄いオーラを纏ったダイヤが現れた。

「あなたが……津島　善子さんですね？」
「は、はい…」

「これまでの欠席の理由、確りと聞かせてもらいますわよ……生徒会長室へと来て下さい」
「わ、分かりました……」

その言葉を聞き、ダイヤは善子を生徒会長室へと連行して行く。その姿を見た誰もは『南無三』と思っていたのは、想像に難くないのであった。

―――――――――――――――――――――――――――

【ヴァンガード部部室前】〔放課後〕
「だ……大丈夫なのよね!?」
「ま、まあ……何とかなるずら」

放課後になり、善子たち1年生はヴァンガード部の部室前に来ていた。目的はもちろん、善子の入部の為である。意を決した3人は、部室の中に入る。

「待ってたよ〜!」
「こんにちは!」
「あれ?その娘は?……入部希望者?」

梨子が善子の事に気づいたので、ルビィと花丸が善子の説明をする。そして善子は２年生の３人に向かって、自己紹介をする。

「つ、津島　善子……です。よろしくお願いします」
「普段は礼儀正しいんずらけど、気を抜くとある事になっちゃうんずら……」
『ある事？』

花丸の言葉を聞いた３人は首を傾げる。すると、花丸は見せ付ける様にお団子の先に黒い羽根を付ける……すると、善子の様子が豹変した！

「フッ、私は堕天使　ヨハネ……天界より追放されし、悲しき天使……貴女たち、ヨハネのリトルデーモンにならない？」
『……』
「《津島　善子》の身体は仮初……我が降臨せし時、全ては闇に堕ちるであろう……」
「こうなってしまうんずらよ…はい」

そう言って花丸は黒い羽根を取った。すると、善子は元の性格へと戻った！

「い、良いんじゃない？」
「え……良いの？」
「うんうん！とっても可愛いよ！」

上から順に梨子と千歌が感想を述べる。自身の予想に反していたので、善子は素っ頓狂な声を上げる。そして善子は聞く。

「え？……こんな私でいいの？」
「良いんずらよ」
「時々ヘンな儀式するかも」
「それも個性よ」
「リトルデーモンになれって言う……」
「それは……嫌ったら嫌って言う！」

千歌は善子に向けて、自らの右手を差し出す。そして、善子の目を見てこう言う。

「善子ちゃん……私たちと一緒に、ヴァンガードしよ！」
「よろしく、お願いします」

そう言って善子は千歌の右手を取る。これでヴァンガード部の人数は６人となった！

ーーーーーーーーー

「そう言えば…ルビィちゃん、昨日は何か言ってたね？」
「そうそう……やり方に提案があるって」
「そうでした！」

梨子に催促されて、ルビィはホワイトボードの前に立つ。そして内容を発表する。

「善子ちゃんが入部した事によって、部員は６人です！そこで……ルビィは《総当たり戦》を提案します！」
「なるほど、つまりは全員が１回ずつ……誰かと戦うって事ね？」
「そうです！全員と当たる様に組めば、各々の戦術を見極める事ができます！」

ルビィが発した提案を善子が要約する。それに納得した５人は、どう組むかの話し合いを始めた。……その結果はこうなった。

ーーーーーー

《総当たり戦》【善子ちゃん歓迎会!!】

〔１周目〕

①梨子さんＶＳ善子ちゃん

②千歌さんＶＳ花丸ちゃん

③曜さんＶＳルビィちゃん

ーーーーーー

「じゃあ……先ずは私たちからね」

「よ、よろしくお願いします」

『スタンドアップ・ＴＨＥ・ヴァンガード！』

何時もの掛け声と共に、梨子と善子はファーストヴァンガードを表にする！今ここに、ヴァンガード部内での歓迎会が始まった！

第７話《梨子ＶＳ善子》

梨子と善子がファーストヴァンガードを開けた瞬間に、ファイトステージに広がったのは……暗き神殿の入り口であった。上空には満月が浮かび、不気味悪さすら連想される。

「行くわよ！〈ヴァーミリオン・ゲートキーパー〉にライド！」
善子の手札５／ダメージ０
「〈ぐらいむ〉にライド！」
梨子の手札５／ダメージ０
ーーーーーー
「善子ちゃんは《ダークイレギュラーズ》……ソウルチャージを基本とした、増強戦術クランだね」
「対して梨子さんは《ロイヤルパラディン》……仲間のユニットを呼んで力を増す、結束の強いクランずらね」
「梨子ちゃんに善子ちゃん……一体、どんな戦いを見せてくれるんだろう？」

曜と花丸が２人の使用クランを分析している中、千歌はただ目の前で起こっている事に釘付けになっていた。

ーーー

《ソウルイン》
①〈艶笑のサキュバス〉

「ヨハネはこれで終わりよ！」
善子の手札６／ダメージ０
ーーー

「チェック・ＴＨＥ・ドライブトリガー！」
梨子の手札６→７

《ドライブチェック》
①〈閃光の盾　イゾルデ〉引

「ゲット、ドロートリガー！パワーはアレンに与え、カードを１枚ドロー！」
梨子の手札７→８
「ダメージチェック」
善子のダメージ０→１

《ダメージチェック》
【１点目】〈ヴリコラカス〉

「クッ……我が闇の力が、疼く……！」
「私はこれでターンエンド」
梨子の手札８／ダメージ０

ーーー

ブラッドサクリファイス　ルスベン
グレード２／パワー９０００／シールド５０００／☆１
アイコン：インターセプト
ーーーーー
「ルスベンが登場した時、ダメージゾーンのカード１枚をヴァンガードにソウルイン！
その後、デッキトップから１枚をダメージゾーンに！」
善子のダメージ１→０／ＣＢ０→１

善子のヴァンガード：ソウル３→４
《ソウルイン》
①〈ヴリコラカス〉

「ソウルに〈ヴリコラカス〉を置いたので、ルスベンの効果で【カウンターチャージ】（１）！さらに〈ドリーン・ザ・スラスター〉の効果でパワー＋５０００！」
善子のダメージ０→１／ＣＢ１→０

ドリーン・ザ・スラスター

パワー６０００＋５０００↓１１０００

「ソウルが増えた……これが《ダークイレギュラーズ》の十八番ね」

「さらに〈プリズナー・ビースト〉を中央後にコール！登場した時、１枚を【ソウルチャージ】！そして〈ドリーン・ザ・スラスター〉の効果でパワー＋５０００！」

善子の手札４↓３

善子のヴァンガード：ソウル４↓５

《ソウルイン》

①〈悪夢の国のマーチラビット〉引

ドリーン・ザ・スラスター

パワー１１０００＋５０００↓１６０００

「この時点で〈ヴェアヴォルフ・ズィーガー〉と〈プリズナー・ビースト〉の効果発動！ヴァンガードのパワー＋５０００……〈プリズナー・ビースト〉のパワー＋２０００！」

ヴェアヴォルフ・ズィーガー
パワー９０００＋５０００→１４０００
プリズナー・ビースト
パワー８０００＋２０００→１００００

「行くわよ…」
『（ゴクリ……）』
「進撃開始よ！〈プリズナー・ビースト〉の支援を受けて〈ヴェアヴォルフ・ズィーガー〉でヴァンガードに攻撃！攻撃した時に【ソウルチャージ】（２）！」

善子のヴァンガード：ソウル５→７
《ソウルイン》
①〈デーモンイーター〉
②〈囚われの堕天使　サラエル〉

ドリーン・ザ・スラスター
パワー１６０００＋５０００→２１０００

ヴェアヴォルフ・ズィーガー
パワー１４０００＋１００００↓２４０００

「一気にパワーが上がった!?…ノーガード」
「チェック・ＴＨＥ・ドライブトリガー！」
善子の手札３↓４

《ドライブチェック》
①〈ヴェアルクス・ゲフライター〉☆

「ダメージチェック！」
梨子のダメージ０↓２

《ダメージチェック》
【１点目】〈アルフレッド・アーリー〉
【２点目】〈小さな賢者　マロン〉

「次！〈ドリーン・ザ・スラスター〉の支援を受けて……ルスベンでヴァンガードにアタック！」

ブラッドサクリファイス　ルスベン
パワー９０００＋２１０００→３００００

「ノーガード……ダメージチェック」
梨子のダメージ２→３

《ダメージチェック》
【３点目】〈ういんがる〉

「フッ、ターンエンド！」
善子の手札４／ダメージ１

――――――――――――――――――――

【ＴＵＲＮ４】〔ＰＬ：梨子〕
「私のターン！ドローして……行きます！」

梨子の手札８→９
「良いわよ…」
「聖なる剣の名の元に、敵を砕くは白き騎士！立ち上がれ……私の分身！ライド〈ブラスター・ブレード〉!!!」
梨子の手札９→８
ーーーーーー
ブラスター・ブレード
グレード２／パワー９０００／シールド５０００／☆１
アイコン：インターセプト
ーーーーーー
「（これが…梨子さんのメインユニット……カッコイイじゃない！）」
「行くわよ…善子ちゃん！」
「ってか、ヨハネ！善子言うな～！」